

はじめて小学生に英語を教える
京都市立小学校（御所南、高倉）と私立京都光華小学校
での実践報告

齋藤由紀*

**Teaching English to Elementary Schools Students
for the First Time
~ At Kyoto Goshō Minami, Takakura and Kyoto Kōka
Elementary Schools ~**

Yuki Saito*

Abstract

This is a practical report of the author's teaching English to the elementary school students for the first time in 2011 and 2012. At that time there were no subjects called English at the elementary schools. It was just called English Activity Course or English Activity Time there. The author was a part time teacher then.

There are some strategies to teach English for the elementary school students. Basically, active learning is needed. Also, English sounds, rhythm, and intonation are very important for students. In addition, teachers should know the interests and favorites of the students, so cooperation and collaboration of the English teacher and the homeroom teacher is useful.

キーワード

小学生の英語教授、TPR、教科担当者と担任

はじめに

小学校での英語授業が本格的に始まることとなった。いつかは小学校でも英語教育が始まるのではないかと思っていたが、筆者自身は七年前にすでに小学生に英語の授業をするという経験をしている。本稿は、小学校での英語活動を実際に担当し、そこで小学五、六年生に英語を教えたことの実践報告にあたる。思い起こせば三十五年ほどにおよぶ教員生活の第一歩を、京都の公立中学校で踏み出した。当時勤務していた中学校は毎日、窓

*さいとう ゆき：大阪国際大学国際教養学部准教授〈2018.6.28受理〉

ガラスが数十枚割られており、朝には教頭先生と一緒にそれらのガラスを掃くことからスタートしたものだ。いわゆる生徒たちの問題行動は枚挙にいとまなく、放課後は会議と家庭訪問で、自宅にはシンデレラタイムを超えての帰宅という日々であった。そのような大荒れの時代で、何とか教員を続けることができたのも、一部の生徒の支えがあったからである。

その後、母校京都ノートルダム女子大学で助手となり、英語を教える対象者は大学生となった。その後も勤務先は変わりながらも英語を教えることができた。特に、将来英語教員を目指す学生のための授業、つまり「英語教授法」や「教育実習」関連の授業では、上述したような学校の実態の中、どのように英語授業を行い、生徒たちとの関係性を築いたのかについて、あますところなく伝えるように気をつけて授業をしている。

どんなに学校が荒れて授業が成立しにくい状況でも、教員が授業の準備をしていけば、聞いてくれる生徒はいるものだ。たとえそれがわずか数名であったとしてもその授業は、聞きたい生徒がいるのだから成立しているのだと考える。毎朝、今日は退職届を管理職の先生に渡して帰宅することになるかもしれない、と思いながら学校へ行っていた。足取りは重く、寝不足の頭は授業の段取りすら考えることすらままならなかった。そして、筆者が行っていた当時の授業はお世辞にも上手とはいえないものであった。

職員室では隣席の英語の女性の先生が、「いつでも授業を見に来てくれていいのよ」と優しくおっしゃってくださる。この先生は、当時学年主任であり、後に、京都市内の中学校で女性管理職に初めてなられた。空き時間には、この先生の授業をすべて参観させてもらって、真似をさせてもらうことから教員生活が始まったとあっていい。筆者が担当するクラスの生徒は、授業に行くと、露骨にベテランのその女性の先生に習いたかったと罵声を浴びせてくるものだった。その時の悔しい思いをかみしめながら、いつかは負けぬ授業をしたいものだと何度も思った。下手な授業を受けてくれた生徒たちに今でも申し訳ない思いがある。だから、筆者の教員生活は、少しは上手な英語授業をしたいという思いに支えられてきている。

その後、再び非常勤講師として京都御池中学校で英語を教える機会に恵まれたのは、このような京都市との縁があったからだといえるだろう。

京都御池中学校は、京都市の数ある中学校の中でもパイロット校とよばれている。ここでいうパイロット校が意味するものは、建物の先進性と教育内容の試みによるところだと考えている。まずは立地の良さ、京都市役所から徒歩で数分のところにある。建物は御池創生館と名付けられ、櫻並木が美しい御池通りに面している。立地の便利さはいかに及ばず、建物も公立中学校とは思えない造りである。屋上にプールを擁し、御池通りに面する一階部分にはレストランなどが軒を連ねている。そのあたりを歩いているだけでは、そこが、公立の学校だとは気づかないかもしれない。加えて、その名が示すように、地域のコミュニティなどが同居する建造物となっているのだ。筆者はそこにかつて京都の町から起こった番組小学校に託した町衆の教育への希望や夢を感じる。つまり、学校が単なる教育施設にとどまらず、そこに住まう人たちとの関わりの中で生まれ、成長してゆく、そんな取り組みを実際に目にすることができるようになってきているのだ。

この京都御池中学校と筆者の縁は、学校が現在の場所に移転する前に遡る。京都御池中学校が現地に移転する前、城巽小学校跡地にあったところに、筆者は非常勤講師としてそこで教壇に立たせてもらっていた。御池通りにできる新学舎の図面を目にさせてもらう機会もあった。そこには「英語ルーム」とよばれる空間が設置されていた。「英語」を勉強するために特別に創られた空間、英語関連のポスターや文字にあふれ、英語の本がいつでも読める場所、それを創出したい。当時の校長であった長者美里先生から幾度も「英語ルーム」をはじめ、この新学舎のまさに先進的な取り組みについて話を聞かせてもらったことを懐かしく思い出す。

パイロット校とよばれる第三の理由は、この学校で実施される教育内容の充実を指す。筆者は当時大学院で英語教授法を研究していた。夢にまでみた研究生活は楽しいものであったが、一方教壇に立てない寂しさは予想以上であった。そこで、京都市の非常勤講師に登録したのである。書類を送ると電話はすぐにかかってきた。当時の人事担当教員は、筆者にとっては元同僚の一人、あの悪夢のような最初の赴任校で、大荒れの中、ともに授業をしていた先生の一人であったからだ。こうして、京都御池中学校との縁ができ、京都市との縁が深まると同時に、その後ずっと筆者を支えてくれることになる先生がたとの出会いがあった。

それから、数年後、新しい校舎で先進的な教育を実現する京都御池中学校で、再び非常勤として教壇に立たせてもらえることとなった。そして、そこでは小学生に英語を教えるという貴重な機会を頂き、初めて小学生に英語を教えるという経験をする事となったのである。

1. 公立小学校（京都市立御所南小学校、高倉小学校）での実践

2011年8月から2012年2月の半年間にわたり、京都市立御所南小学校と高倉小学校で英語活動を担当する機会に恵まれた。これを読まれている方の中には、この二つの小学校の名前を聞かれた方もいるかもしれない。というのも某教育関連企業が実施する全国学力テストでしばしば取り上げられる教育推進校であるからだ。教育に関心のある保護者の方の中には転居してでも我が子を入学させたいと思う方も多いらしい。その結果、両小学校とも京都の街中にあるにもかかわらず、在校生数は、収容人数をはるかに上回るという状況が続いている。そこで、この収容できないという問題を解決するために、両小学校の五、六年生は、京都御池中学校に通うこととなっているのだ。つまり、京都御池中学校は、名前こそ中学校となっているものの、その実態は小学生も通う学舎である。中学校の生徒会は、小学生までを含んで自分たちの共同体を「おいけふあみりー」と称している。この学舎で教える教員および通う児童生徒の一部には、特権意識を持つ人もいるかもしれない。そのことの是非は置いておく。ただしそれだけの雰囲気のある一味も二味も違う学校であるといえるだろう。

さて、小学生に英語を教えるとなったとき、正直戸惑いを感じた。子どもは発達が著しく、中学一年生にアルファベットから教え始めるのはまた違うだろうと思ったからだ。また、御所南小学校と高倉小学校では、同じ小学校とはいってもそれぞれ雰囲気が違うこ

とも同じ職員室にいながら感じていた。

とりあえず、授業を参観させてもらった。小学校は、中学校と異なり、担任の先生がすべての教科を教える。そのため、クラス全体も担任の先生による個性や学級づくりがなされている。だからそのことを把握することが重要である。

参観のあと、中学校の英語担当教員と各小学校の担任団との会合をもった。案の定御所南小学校と高倉小学校では、英語活動に取り組む姿勢が若干異なることを知ることができた。担任が主となり教えることは共通していた。しかし、英語専科の教員への要望は異なっていたのである。

普段接することがない児童に突然英語を教えるために教室に入ってもうまくいくことはほぼない。担任の先生から、それぞれの学校がそれまでに実施してきている英語活動に基づいて、要望は出された。その中で、英語の発音やチャンツを児童に教えてほしいという要望は、共通していた。

当時、両校で採用されていた英語活動のテキスト「Hi, friends1」を読んで内容を理解することから始めた。この本は小学生向きに身近な内容で英語に親しむように工夫されている。その中から実際の児童たちが興味や関心を寄せそうな単元を選び実施することとした。

五年生では、異文化に触れることを想定した世界の国を知ろうという単元を取り扱うこととした。担任の先生からは、社会科の授業で児童の興味のある国の国旗を作成してみる、という提案があった。児童が作成した国旗を用いて、ミッシングクイズや、スリー・ヒント・クイズなどを考えて英語活動では行っていった。児童の中には、「日本が好きで他の国には興味がない」と答えた子もいた。もちろんその場合は日本を扱うこととした。

興味を持たせ好きな国を決めるために、旅行会社に勤務している卒業生に、不要となった旅行パンフレットを児童数もらいうけ、配布することにした。カラー刷りのパンフレットを手にしながら、児童たちはそれぞれ興味を感じる国を選ぶことができた。その後、担任の先生は、調べ学習で外国について調査すること、衣食住に関するキーワードなどが教えられた。

六年生では、道案内をしようという単元を扱うこととなり、基本的な道案内に必要な表現を練習した。そのあと、実際に校舎の中にある場所を英語で案内してみることにした。グループで実際に御池中学校の中を案内させると、普段は気にも留めていなかった場所を知ることにもなったようで、英語が子どもたちの口からいきいきと出てくるのであった。

こんな風を書いてくると、まるで問題なく英語活動が進んでいたように思われるかもしれない。実際は、英語を口にしたくないという児童も数名いた。このような児童には決して強要することなく進めることが肝要だといえるだろう。もちろん、担任の先生がうまく援助してくれることで乗り切ることが可能となった場合がほとんどである。しかし、すべてを担任の先生に任せるようでもいけないとも考える。教科担当としては、できるだけ児童との関わりを持ち、関係性を深めようとするのが重要である。すぐには人間関係がう

まく結ばなくても、英語担当者から積極的に近づくことで、児童も安心感をもってくれるようになった。毎回の授業の後、教室で後片付けをしているときに、数名の児童が話かけられるようになっていた。新採教員であったころ、ベテランとよばれる先輩教員から「授業の後に子どもたちから話かけられるなら、その授業はある程度成功と認めていいよ」と言われたことを思い出す。子どもたちも英語の時間にやってくる教員に親しみを感じてくれるようになったのだろう。そして、半年の授業が終わるころには、「英検三級受かりました」といった素晴らしい報告をしてくれる児童も現れた。筆者の予想以上に子どもたちの英語への関心は高く、英語を話してみたいと願っている児童は多いのだと実感した出来事である。

この時期、英語活動を担当するなかで、気にしていたことは三つある。一つ、文字よりも音を中心にして教えること。ただし、児童が文字を知りたいというときには単語でも文章でも英語で書いて示すようにした。なぜなら筆者自身の英語との出会いの時期を思い出すともっと知りたいという欲求があったからだ。例えば、教科書にイチゴの英語が出てきたら、他の果物の英語もたくさん教えてもらいたかった。自分で調べられるようになってこの欲求は満たされるようになっていったけれども、まだ初期の頃、辞書も買っていないような時期には、リストでもいい、英語の単語をもっと教えて欲しかったことを思い出す。「鉄は熱いうちに打て」というのではないか。

二つ、TPRの手法を取り入れることなどを意識して授業を行った。TPRはJ.J. Asher博士が編み出した身体活動を伴って外国語を学ぶ方法である。育ち盛りの子どもたちには、ある意味英語を体育のようにして覚えることは有効だ。“Run!”と聞いて走る。“Stop”で止まる。教員が英語を口にしながら動作をただ単に行うだけで、英語を楽に習得できる。

三つ、すでに述べてきたが、担任の先生との連携を大切にすることである。

2011年8月から2012年2月に、京都市立御所南小学校、高倉小学校での英語活動を担当することができたのに続いて、2012年6月から12月には、当時奉職していた私立京都光華女子学園中学高等学校の関係から京都光華小学校でも英語活動を担当することとなった。

2. 私立光華小学校での実践

2012年からは、京都光華中学高等学校で勤務するようになった関係で、小学生に英語を教える機会に恵まれた。御所南小学校と高倉小学校での実践経験があったため、筆者が英語活動を行うこととなった。

京都光華小学校では、従来英語のテキストを用い外国人教師が英語授業を行ってきたが、児童の興味関心に基づいた英語授業をとる要請を受けて、五、六年生を対象に週に一度授業を行った。「学校を案内しよう」など毎回独自のテーマを決めて、教材を作成し、児童が楽しく参加できるように工夫をした。

教材作成としては、数字カードを作ってみた。厚めのボール紙で少し大き目のサイズのものにした。何度も触ったりめくったりするのに、破れずに使用できることを考えたささいな工夫の一つである。また、後ろの席の児童からも見えるような大きさと数字を書くこ

とも重要だ。

この数字のカードを使って、数字を英語で言う活動。1から順に言うことができれば、逆に大きな数字から小さな数字へ言うこと。カードをランダムにしておいて、めくるとすぐに言ってみる活動などをしてゆく。このようにゲームの要素を取り入れれば、児童は積極的に楽しみながら参加してくれる率がアップしていくというものだ。

英語を口にする雰囲気が出来上がったところで、チャンツによる練習。“What's this? What's this? What is this?” 教壇や児童がもっているものなどを次々に指さしながら英語で言っていく。中学一年生を相手に英語の導入をする際、とりあえず身の回りのものを何でもかんでも英語で言ってみるようにさせたい。だから箱を用意して、それらのものを片っ端から入れたものだ。教室には毎時間この箱を持参した。名付けて「ゆきのミラクルボックス」、あの箱を思い出す。本やノート、はさみ、定規、消しゴム、お弁当箱、財布、バナナを象った筆箱などもあった。途中から本物であればもっと興味をもってもらえるだろう、そう思ってバナナは本物にしたことなどを思い出す。確かに、本物を見せるとがぜん盛り上がったものだ。だから、今回も箱ならぬ、かばんにいろいろなものを詰め込んでいき、児童にそれらを少しずつ見せながら、何が出てくるのかを当ててもらうようにして英語を次々と言っていく活動をしたのである。

今日のテーマは、一日の生活を英語で表現できるようにしてみよう、である。朝起きて身支度を整え、登校して放課後帰り、夜就寝するまでの英語表現をまなぶ。ここではTPRを取り入れて、“Get up.” といいながらあくびをするジェスチャーをする。子どもたちにはまずは聞いてもらうことを意識しながら行う。英語を口にすることを強制しないように注意する。導入で数字を勉強したことを使って起きる時間をいえるようにする。友達に尋ねたりもしただろうから、それは“What time do you get up, ~?” といえればいい。子どもたちの聞きたい気持ちに応えながら授業を進める。一人で目が届かない部分は、担任の先生の力も借りる。

たくさん英語をいえるようになったら、準備しておいた絵カードを配る。一日の生活の主だったものがイラストで描かれているものである。時計のマークの中に、一人ひとりが自分の起きる時間や学校へ出かける時間などを記入していく。出来上がったところで、クラスメートにききにいく。この際、ルールは2つある。一つ、英語できくこと、答えること。二つ、黒板が叩かれる音をきいたら自分の席に戻る。さあ、始まりだ。教室中に英語がとびかう。

なお、私立光華中学高等学校、光華小学校は、2014年4月から2018年3月にわたり、文部科学省の指定を受けて英語教育強化地域拠点事業を实践することとなった。小学校での英語教育についてどのような取り組みが必要であるかについて授業実践と研究を行うこととなったのである。

光華学園が幼稚園から大学までを有する総合学園であることを活かして、特に次のようなことに取り組んだ。(一) 小学校での英語教育から中学や高等学校への橋渡しをどのようにするのか (二) 他教科とのつながりを意識した英語教育 (三) モジュールで行う効果的な英語教育の在り方 (四) 京都という場所、その伝統や歴史を意識した英語教育といっ

たことである。

3. まとめにかえて

小学生に英語を教える、その時どのようなことに気をつけるといいのだろうか。ここでは上述したような実践が果たして小学生に英語を教える際によかったといえることだったのか、あるいはよくなかったのかをいくつかの文献を参照しながら簡単に考察しておく。

筆者が英語活動を担当した時から早五年以上の月日が流れた。小学校でも英語は教科となり評価も含めて実施することとなっている。小学校での英語教育をめぐる、賛否両論があり、実施に向けて時間を要したことは周知の事実である。しかし、教科として実施されることになったのだから、やるのであれば児童たちの益になるように実施したいと願っているものの一人である。吉田（2017）は、ベネッセコーポレーションが2015年に発表した「小学校英語の役立ち感」という資料に立脚して以下のように述べている。

小学校で英語をやってきた生徒は、学年の進行とともに少しずつ下がっていくものの、4技能の低下と比べるとわかるが、中1から高3までずっと一番上を保っている。／個別の4技能、聞くこと、話すこと、書くこと、読むことが学年進行で下がっていくのは「小学校のようにコミュニケーション活動をやっていないとこのように下がる」ということの証明であり、中学・高校において小学校と同じように「英語は楽しい、おもしろい」という気持ちを育てていけば、モチベーションは持続するということの証明でもある。これが小学校英語にとっても大事なことである。（pp.19-20）

小学校の英語教育では、コミュニケーション活動を軸に、英語は楽しい、英語を使って自分の言いたいことが言える、伝えることができるのだ、という気持ちを育てていきたいものだ。そのために、教員はどのようなことに気をつけるべきなのだろうか。同じく、吉田（前掲）は、指導者の英語力と指導法について、教員の英語力と生徒の英語力の相関についての資料に基づいて以下のことを指摘している。

大事なのは指導者が一方的に講義するのではなく、生徒が発話することや、この調査にあるように、指導者は少なくとも授業時間の50%以上は英語で指導しようということなのである。（p.17）

小学校では、授業中できるだけ平易な英語で児童たちと何らかの活動することを念頭において授業を実施するといいたいだろう。授業をできるだけ英語でやろうとすることが児童たちの英語使用量を増加させることに影響することを念頭にできるだけ英語で行うことを実践したいものである。そのためには、指導者としては英語力の研鑽に努めると同時に、児童が普段から英語に触れるように工夫を重ねていきたいとも考える。例えば、階段や教室に英語がはられているような工夫をしたい。教室にも英語のフレーズが書かれている。このような小さなこと、やりやすいことから始めていけばいいのではないだろうか。

京都御池中学校でも光華小学校でもそんな取り組みが実践されていた。階段には、英語のフレーズが日本語とともに貼られている。だから、京都御池中学校へ通う御所南小学校や高倉小学校の児童は自然に、日々英語を目にすることとなっていた。他にも、「今日の一勉」というコーナーが設けられていた。英語の週がやってきたとき、筆者も図1のようなものを作成したことがある。月曜から金曜まで、一枚ずつ貼られる。朝の学活で教室に行った担任の先生から「今日の一勉にはどんなことが書かれてたかな」ときいてもらう教室も出てくる。明日の回答が楽しみになる、そんな子どもたちの声を耳にすると、「次はどんな話題にしようか」と出題者も楽しみになってゆくのだった。

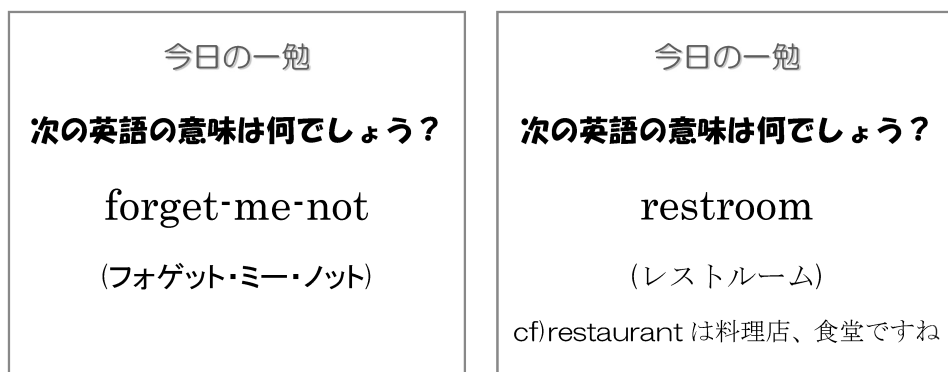


図1 「今日の一勉」例

小学校英語授業で、重要なことの一つに担任の先生の役割があるだろう。英語専科教員が出張で教えるからこそ、担任の先生が果たす役割はより重要となる。英語が苦手な先生もいらっしゃるだろう。ここではそんな担任の先生の役割と英語という教科およびそれを担当する専科教員との連携について考えておきたい。

学習指導要領では、英語という教科が他教科・領域との関連についてどのように定められているかについて、まずはみてみよう。

エ 言語活動で扱う題材は、児童の興味・関心に合ったものとして、国語科や音楽科、図画工作科など、他教科等で児童が学習したことを活用したり、学校行事で扱う内容と関連付けたりするなどの工夫をすること。

英語担当教員が一つの授業を組み立てる際に、担任の先生から今国語ではこのような単元を勉強しています、といった情報がもらえればきっとそれに関連付けた話題を英語でも提供することが可能となるだろう。御所南や高倉小学校では、担任の先生がたが主体的に英語ではこんなことをやってほしいとか、こんな単元を今勉強しているので、それに関連したことで授業をしてもらえないだろうか、と相談されたことを思い出す。

藤田（2017）は、「英語と他教科等との間は一方通行ではなく、双方向に関連付けられることで教育課程全体が活性化し、主体的・対話的で深い学びが実現される。」（p.63）とこのことについて言及している。

担任の役割については、松香（2017）が、こんな学級であってほしいとして4つのことを指摘している。（一）他者を温かく迎える学級、（二）人の話をきちんと聞ける学級、（三）声をだせる学級、（四）積極的な態度がある学級。（松香、2017、p.72）

普段接していない学級に行って授業を行うことは、授業者にとって不安を感じることである。だから、上のような学級を作っておいてもらえれば、たとえ週に一度しか会うことのない英語授業担当者でも児童とともに英語授業を楽しく行うことができるはずである。

また、担任の先生も英語専科教員や外国語授業補助者を信頼してもらい、英語授業について相談してもらいたい。オーセンティックな教材が必要ならば、ICT機器の活用なども含めて提案できることがあるはずである。

英語授業においても、児童が単なる音声の物まねで終始することなく、考えたり自分なりの意見を発表することを大事にしたい。これを実現するためには、授業の目標を英語による「発信型」とし、英語を使って意見交換をすることや発表をすることが肝要だと考える。そのためには、教授者側は児童が興味・関心をもっていることを知ることが重要となる。その時には普段児童と接している担任の先生抜きには考えにくいものだ。

英語を指導する側としては、どのようなことに気をつければいだろう。泉（2017）は、この問いに対する答えを以下のようにまとめてくれている。（一）児童の発達段階や知的な好奇心、興味・関心を考慮した指導を行う。（二）音声の基盤に立った上でゆるやかに文字指導に移行する。（三）英語を用いる場面と必然性を与え、指導者も英語を用いてやり取りを行う。（四）全人教育である小学校教育における指導を意識する。（五）評価の仕方を工夫する。

普段接することのなかった小学生児童に英語を教えることは、改めて自身の英語の発音でいいのか、練習しなおすことになった。筆者は中学校で英語と出会った。学校で先生がかけてくれるテープレコーダーから流れる英語を聞いて、「あんな風にいつかはしゃべりたい」と憧れたことを思い出す。決して英語の成績がよかったわけではない筆者が、大学卒業後、英語の教員として教壇に立っているのは、英語と出会ったこの時期に、親に買ってもらった教科書準拠の英語テープの存在が大きい。何度も何度も英語のテープを聞いた。そして、ただひたすらに真似てみた。小学生という時期に英語に触れることができれば、発音もきっと英語母語話者にかぎりなく近づける子どもたちが増えそうだ。だから、子どもたちの知的な好奇心に応えられる本当に意味のある楽しい英語授業をめざして、頑張りたいものである。

引用文献

- 泉恵美子 2017 「小学校外国語教育はどう変わるか - 指導者が押さえておくべきこと」 金森強・本多敏幸・泉恵美子 編著『主体的な学びをめざす小学校英語教育 - 教科化からの新しい展開-』教育出版株式会社 pp.14-19
- 藤田保 2017 「他教科・領域との関連について考えよう」 吉田研作編集『小学校英語教科化への対応と実践プラン 時間割・指導・評価・研修…全面实施までにすべきこと』（株）教育開発研究所 pp.61-64
- 松香洋子 2017 「学級担任指導ということを理解しよう」 吉田研作編集『小学校英語教科化への対応と実践プラン 時間割・指導・評価・研修…全面实施までにすべきこと』吉田研作編集（株）教育開発研究所 pp.70-75
- 吉田研作 2017 「小学校英語の基本的考え方とこれからの方向性」 吉田研作編集『小学校英語教科化への対応と実践プラン 時間割・指導・評価・研修…全面实施までにすべきこと』吉田研作編集（株）教育開発研究所 pp.8-21